

これに関して、(今村三)に興味深い記述がある。ここには、落語「死神」に関して、「この落語の原作は、イタリアのオペラ『靴直しと妖精』である。私は赤坂のローヤル館で、清水金太郎、静子夫妻と原信子の演じたのを見たことがある」と書かれているのだ。この記述を見ると、どうやら、「クリスピーノ」ルーツ説は今村氏の説のようであり、今村氏が、たまたま赤坂で上演された「クリスピーノ」を観たのが、この説を生むきっかけだったのではないかと思われる。おそらく、今村氏はグリムの「死神の名づけ親」をご存知なかったであろう。そして、こうして生まれた今村氏の説が、(今村四)に記され、それが、その時の誤植もろとも、多くの本に受け継がれていったのではないだろうか。落語「死神」がグリムの「死神の名づけ親」と同じ話だという指摘は、すでに、(永井)にあるが、今日にいたるまで、きちんとした検証がなされてこなかったようであり、(東大)(永井二)の記述も変わっておらず、(今村)(今村二)も、「クリスピーノ」に直つてはいるものの、内容は、(今村四)と変わっていない。

(山本)は、かなり調べているようであり、オペラのタイトルは正しく書かれており、また、落語のルーツとしては、

グリムそのものもあげているが、これも、根本的に、従来の「クリスピーノ」ルーツ説から抜け出ていない(福地桜痴については後述)。(市川)にいたっては、「クリスピーノ」については、(永竹)にあるあらずじ紹介を参照して「内容が落語と違う」と気付いていながら「グリム童話も参考にした」と考えた方が理解できる」と述べるにとどまっている(山本)とほぼ同様)。

前記のあらずじでわかる通り、落語「死神」の要素で、「クリスピーノ」にあつてグリムにないものは何も無い。したがって、筆者は、現時点では、落語「死神」の成立に、オペラ「クリスピーノ」は全く関係がないのではないかと考えている。それよりも、落語「死神」は、グリムから直接作られた可能性の方がずっと高いと思われる。

なお、落語にしたのが円朝であるとする根拠は、二代目金馬の証言である(名人)に引用されている「講談倶楽部」第一五卷一三号、大正一四・一二の金馬の芸談(註三)。